

サン=タルヌール修道院長ジョンの『ゴルズのヨハネス伝』

(974-984 年頃) における社会的流動性・宗教的刷新・共同体形成¹

スティーヴン・ヴァンデルプッテン (ヘント大学)

訳：弓岡 弘樹

現在フランスにある都市メッス²から南西数マイルほど離れたところに位置する、8 世紀の修道院であるゴルズ修道院にて、934 年初頭、5 人の聖職者と 2 人の少年が修道院生活を始めました。サン=タルヌール修道院長ジョン³が 970 年代から 80 年代にかけて著した、先述の聖職者の 1 人であるヨハネスという名の人物の伝記によると、彼ら【=ヨハネスら】⁴はメッス司教アダルベロの強い勧めでこの生活を始めました。この司教はその修道院【=ゴルズ修道院】の財産を回復し、霊性を刷新するための運動をその直前に始めたばかりでした。この二つの活動のうちの前者の一環として、アダルベロはアデルベルトゥスという名の俗人領主にベネフィキウムとして以前与えられていたいくつかの財産を返還することを約束しました。そして後者のため、【すなわち霊性を新たにするために、】彼【=アダルベロ】は 7 人を連れてきて、修道院長を選出し、聖ベネディクトゥスの『戒律』を採用し、そして修道士になる許可を彼らに与えました。それから間もなく、修道院長に選出されたエイノルドゥスをメッスの司教座聖堂で迎え入れ、エイノルドゥスに『戒律』の遵守を口頭と書面で誓約させ、そして修道士のカウルを彼に授けました。その後、他の 6 人の回心者が修道誓願を立てました。そして最後にアダルベロは、自らが介入する前にゴルズ修道院に入っていた数人に目を向けました。彼【=アダルベロ】は彼らを修道士から単なる修練士に下し、彼らの新しい指導者としてエイノルドゥスを受け入れるように指示しました。

10 世紀を専門とする研究者たちは、長い間『ゴルズのヨハネス伝』⁵のこの一節に依拠して、メッス大聖堂での儀式を、10 世紀のロタリングアの宗教生活の歴史にとって重要な意味を持つ出

¹ 2023 年 12 月 7 日に東京大学でこの招待講演を行うために親切にも招待をしてくださった菊地重仁准教授と、有益なコメントをくださった参加者の皆さんに、心から感謝をしたいと思います。引用と完全な形の文献目録を含む全では、Steven Vanderputten, 'Community Building as a Vector of Social and Religious Change in the Life of John of Gorze (974/978-84)', in *Anglo-Norman Studies* 45 (2022), pp. 164-180 として以前に出版されました。この講演は Boydell 出版社のご厚意により公にされています。

² 本翻訳における地名表記は原則として現地音主義に則る。ただし、カタカナ表記において慣習的に定着しているものがある場合は、そちらを採用した。(訳注)

³ 人物表記に関して、先行研究として紹介されている研究者をアルファベット表記にし、『ゴルズのヨハネス伝』に登場する人物並びにこの作品の同時代人をラテン語読みのカタカナ表記とした。ただし、ラテン語読みでない表記が一般的である人名に関しては慣習に則った。また、同作の著者であるところのサン=タルヌール修道院長ジョンは、ゴルズのヨハネスと区別するために、英語読みカタカナ表記にしている。(訳注)

⁴ ヴァンデルプッテン教授に確認を取った上で、本翻訳では適宜修正・補足を行っている。なお、訳文において訳者の補足説明は【】で示している。(訳注)

⁵ ヴァンデルプッテン教授によると、本講演で分析対象となっているテキストのラテン語タイトルをもとにすると『ゴルズ修道院長ヨハネス伝』*Life of John, abbot of Gorze* と訳され得る。しかし、本講演でも述べられているように、本作品は未完成のテキストであり、ヨハネスが修道院長を務めていた時期に関してはテキストの中で語られていないため、しばしば修道院長 abbot という言葉の省かれたタイトル *Life of John of Gorze* が使用される。以上のことを踏まえて、本翻訳では、ヴァンデルプッテン教授の講演原稿に従い『ゴルズのヨハネス伝』とした。なお、以降本文中では『ヨハネス伝』と表記する。(訳注)

来事として描いてきました。Ernst Sackur、Kassius Hallinger、そして Josef Semmler といった影響力のある 19・20 世紀の研究者たちの見解では、それ【この儀式】は三つの大きな成果を伴う地域的な改革運動の誕生を象徴的に示しています。これら【の成果】のうちの一つは、ルイ敬虔帝と司教たちが 816 年から 819 年にかけてアーヘンで行われた改革集会において定めた聖ベネディクト戒律に則った修道院運営と戒律遵守という規範的な理想が再び脚光を浴びたことです。そして二つ目【の成果】は、修道院の財産と役職に対する俗人の侵犯、修道院の構成員の地位と行動の「世俗化」⁶、そしてこれらの結果として起こり得る、神と交わる特権的な場としてのこれらの場所【=修道院】の衰退をいかにして防ぐべきか、その模範としてゴルズ修道院を仕立てたことです。そして三つ目には、この地域的な改革運動の拡大と活動を調整する主要な制度的中心地として、トゥールのサン=テール修道院とトリーアのザンクト=マクシミン修道院に並んで、ゴルズ【修道院】が現れたことが挙げられます。他の修道院においてその【=ゴルズの】修道士が修道院長に任命されたことに関する証拠や、【修道院間の】ほんのわずかな接点に関する証拠にもとづいて、Hallinger や彼に続く研究者たちは、その修道院【=ゴルズ修道院】の慣習と統治実践慣行がロタリングアの広範囲にわたって広く採用されたという仮説を立てました。

1980 年代後半以降に公刊された研究により、徐々にこれらの見解は解体されていきました。第一に、Egon Boshof と John Nightingale は、アダルベロの介入以前の数十年間のゴルズ【修道院】の状況が、教会指導者【=アダルベロ】の擁護者たちが主張していたほど、改革後のそれと根本的に全く異なっていたわけではなかったことを立証しました。さらに彼らは、アダルベロの介入のタイミングと方法が、政治的な偶然性および統治者としての司教にして貴族であるという彼の自己表象と結びついていたということを明らかにしました。そしてまた彼らは、とりわけ譲渡されてしまっていた財産について、司教がその一部の返還を約束よりも引き延ばしたり、ベネフィキウムとして彼の世俗の支持者たちに分け与えたりしたことから、修道士たちの立場からすれば司教による彼らの組織の「復興」は長短が入り混じった恩恵であったということを証拠立てながら主張しました。第二の研究の流れとして、Anne Wagner らは、修道士たちがロタリングア各地で改革された修道施設において運営と靈性に関する均質の「ゴルズ的」な要素を広めたという考えを批判しました。彼女たちはまた、これらの場所における実践や経験知の改革・形成に地域的文脈がなんら重要な役割を果たさなかったという、旧来の研究においてなされた示唆を否定しました。そして最後に彼女らは、系列修道院のネットワークにおける指導的組織という以前にゴルズ【修道院】に割り当てられた地位を切り崩し、代わりに、個人的な関係こそが修道院改革の理想と方式を広める主要な繋がりであったことを示しました。

修道院改革の伝統的な物語^{ナラティブ}に対するこれらの修正は、『ヨハネス伝』を見直すように我々に働きかけてきます。これ【=作品】においてメッスの大聖堂での儀式は、組織的な改革運動の始まりとしてではなく、最も完全な形での宗教的共同生活を確立しようとする、ヨハネスとその仲間たちの探究における一つの段階の始まりとして明確に描かれています。物語の序盤では、彼らそれぞれがその地域の修道院において存在した選択肢にいかなる不満を感じていたか、さらに彼らがそうした状況への反応として、禁欲的な放浪者、隠遁者、都市の隠者、家庭で禁欲的な生活を行う者、あるいは囲壁のうちにこもって修道者として暮らしていた男女とともにする様々な形の

⁶ 本翻訳では、講演原稿中にある（）及び〔〕はそのまま（）及び〔〕で表している。また、講演原稿中にある“及び”は「」で表している。（訳注）

共同生活をいかに試みたか、そして最後に、司教アダルベロがゴルズ【修道院】で修道生活を行うよう彼らに強いるまで、彼らがそのような試みを一つ、また一つと実行していった様が説明されています。従って、その【=物語の】著者の主張は、ロタリングアの改革運動を「腐敗を除去するものというよりも […]、我々が達人的宗教意識 […] と呼び得るものを備えた新しい共同体の創造」⁷として概念化し直すことを提案した Franz-Reiner Erkens と Charles West の見解に説得力を与えるものです。これらの研究者の見方では、修道院を復興しその構成員たちの霊性を刷新しようとする、聖職者のあるいは俗人の支配者による介入は、俗人、聖職者、そして修道誓願を行った修道士たちを含む混成集団が、極めて意欲的な禁欲実践者たちの共同体を作り上げるという流れに付随したものに過ぎませんでした。この流れは宗教的な「景観」を大きく変えるものでした。というのも、一つにはそれ【=この流れ】がそうした景観をより複雑にしたからであり、またもう一つには、固定化されていた宗教的組織に利害関係を有していた人々から反応を引き出したからです。

以上のような新たな見方を取ることで、私たちは『ヨハネス伝』の中に描かれている繋がりや経験に肉薄できます。しかし、伝統的な「改革」概念に頼りすぎているため、これ【=この見方】もまた全面的に説得力があるとは言えません。【というの、】現代語でも使われているように、「改革」【という言葉】は計画志向の論理、未来志向の原動力、そしてイデオロギー的な一貫性を含意しており、これら三つの要素は全て、ゴルズのヨハネスの伝記において確認される「かなり乱雑な」現実とは相いれない特徴【だから】です。この物語が繰り返し強調しているのは、絶え間なく顔ぶれを変えていくヨハネスとその仲間たちが、共同体形成というあいまいな目標を目指してそれぞれの異なる背景や期待を調和させようとする試みの、暫定的な性質です。さらにこれ【=物語】には、彼ら個々人の内の何人かによる世俗的・宗教的な共同体を形成するための努力が、様々な点で重複していたことを示す手がかりも含まれています。そして最後にこれ【=物語】が示唆するのは、このような共同体形成の試みは全て、政治的、社会的、イデオロギー上の対立を、あるいは個人的な対立さえも、なくすのではなく、単に目的のために利用したに過ぎず、その結果、新しく作られた共同体の存在はいずれもせいぜい不安定なものでしかありませんでした。これらの議論は、10・11 世紀のイングランドに関する Stefan Brühl の最近のモノグラフを思い起こさせます。彼は、改革を複数の「価値共同体」(Wertegemeinschaften) からなる社会的現象として再定義しています。すなわち、同じ倫理的価値観と社会的・宗教的变化に対する同じ関心を共有しているながらも、その変化を達成する方法と長期的な結果に関する明確な見通しを持っていなかった人々の混成集団からなる社会的現象としての改革です。そしてもう 1 人思い浮かぶのが、オーストリアの研究者である Walter Pohl です。歴史上の共同体が学び発展するには対立・紛争が必要だったと彼は述べています。

社会的・宗教的な変化のベクトルとしての、対立・紛争によって推進された共同体形成プロセスと解体プロセスとの間のこのような緊張関係こそが、『ヨハネス伝』における著者の立論にとって重要でした。以下で私は、当該テキストの三つのセクションにおいて共同体形成・解体の事例を見ていき、それらを文脈に即して理解し、最後にはさらに著者が言及しなかったもの【=事例】と突き合わせます。これらの事例は、まずヨハネスの教育と一連の世俗的な共同体への関与を、次に「秘密の隠者たちの団ソキエタース体」の出現と宗教的な共同体生活の理想形の追求を、そして最後にゴルズ【修道院】における聖ベネディクト戒律を遵守する修道士たちという新たな集団の任命とそ

⁷ 講演原稿中にある引用箇所も本文訳者による翻訳である。(訳注)

の後15年にわたる集団の発展を扱っています。私の目的は二つあります。一つは、10世紀の宗教的・社会的変化に関するこの重要な物語に対して、改革という問題含みの概念に煩わせられることのない新たな読みを提案することです。そしてもう一つは、『ヨハネス伝』を用いる際に我々が直面する方法上の課題に注意を向けさせることです。これまでの研究者たちは、このテキストが歴史的な文書として全般的に信頼できるものだと主張してきましたが、実際には二つのことをするために、すなわちヨハネスの社会的・霊的上昇を能力主義的な理想像として描き出すために、ゴルズ【修道院】の改革共同体をベネディクト派修道院改革の狼煙として表現するために、その【=物語の】著者が共同体の形成・解体の過程に関する文字化された記憶に大幅に手を加えていた十分な証拠があります。両方【=この著者の二つの目的】が、私がこれからこの講演の三つの連続するセクションにおいて議論していくように、10世紀初頭の現実に関する非常に主観的な説明を生み出しているのです。

伝記的な主題群と形成されるコミュニティ群

『ヨハネス伝』は、970～980年代に執筆されてから中世の終わりに至るまで、広く知られた物語ではありませんでした。現存しているのは10世紀後半に作られた手稿本1点のみであり、17世紀に好古家によって再発見されるまで、五指に余る数【の写本】が作られたとは非常に考えるににくいのです。この物語が難解なラテン語で書かれており、また多くの文章の意味が非常に取りにくいことが、【この物語が】普及しなかった原因の一端であることは間違いないでしょう。さらにもう一つの理由として、サン＝タルヌール修道院長ジョンがテキストを書いている途中で執筆戦略を変えたために、物語の構成に一貫性が欠けていることがあげられます。著者自身の証言によれば、彼は当初、まず主人公の少年期、成人初期および回心を、次いで修道士としての彼の生活を、そして968年から彼が亡くなる974年までの間の修道院長時代を扱う3部構成で、伝統的な型の修道院長伝を執筆する予定でした。しかし、現存しているテキストの途中で、彼はその構成をやめ、代わりに時系列に沿わない形で書き続けました。ゴルズの修道士12人以上に加えてさらにヨハネス自身を道徳的に描写し、ゴルズ【修道院】の所領管理者という立場でのヨハネスの活動を述べ、そして最後に、皇帝オットー1世の要請で行った、コルドバのカリフの宮廷への外交任務を描写したのです。そしてここで、おそらく著者が死去したため、文が途中で切れてしまっています。著者が最終的に最初の二つの部分のどちらか、あるいは両方を、全体としてより一貫した形にするために書き直そうとしていたのかどうか【は分かりません】。校訂版や翻訳を自由に使えるにもかかわらず、現代の読者は、著者が亡くなる時点でどのようなことを意図していたのかを知ること、ましてや完成した『ヨハネス伝』がどのようなものになるはずだったかを想像することに苦労してきました。同時代人やその後の中世の読者たちが当惑しなかったと考える理由はありません。

さらに、この物語が普及しなかったもう一つの理由として、主人公の描き方が普通でなかったことがあげられます。Giulia Baroneは、『ヨハネス伝』が大仰な身振りや奇跡ではなく、「日常的な完徳」からなる10世紀のキリスト教の聖人観を呈していると指摘し、またオーリヤックのゲラルドゥス、ケルンのブルーノ、そしてボヘミアのヴァーツラフらのよく知られた聖人伝と比較しました。しかし、Guy PhilippartとAnne Wagnerは、この評価に微調整を行い、サン＝タルヌール修道院長ジョンが宗教的な至人としてのヨハネスの功績に対して畏敬の念を抱いているとしても、

彼によるヨハネスの描写は確実に聖人のそれではないと主張しました。当時としては珍しく、著者はこの人物【=ヨハネス】の慎ましい出自、性格の欠陥、そして同僚や目上の者との数々の個人的な衝突に読者の注意を幾度も引き付けることを避けませんでした。加えて著者は、内なる感情を常に秘め、生涯における真の目標が彼の最も親しい仲間にとってさえもあいまいだった者として、ヨハネスの人物像を描いています。そして最後に彼はヨハネスを、俗界や聖界の有力な支持者たちとの入念に整えられた繋がりや、腕の立つ所領管理者としての彼の評判、そして根気強い学びの習慣によって昇進をしていった、立身出世を望む精力的な人として描いています。

『ヨハネス伝』には、こうした態度やそれが彼にもたらした恩恵が、彼の一部の同僚をいかにいらだたせていたかを私たちに明らかにする文章がいくつか含まれています。彼らは自身の世俗の社会的地位を頼りに、彼が日和見主義者であると非難したり、あるいは彼を成り上がり者として扱ったりしました。私がすでに言及した他の理由と並んで、この異例な主題も、『ヨハネス伝』がロタリングアやその他の地域の宗教施設の図書館に当然追加されるべきものとはならなかった理由を説明しています。

しかし、中世において無名であったにもかかわらず、サン=タルヌール修道院長ジョンの書いた物語は、現存している極めて注目し得る 10 世紀の物語の一つとして、現代の研究者から評価を受けるに十分に値するものです。慎ましい出自でありながら自らの道を自分で切り開き、しかし同時に多様な世俗的・宗教的共同体との関わり合いの産物でもあったというヨハネスの人物像は、当時を社会的な流動性に欠けた時代だとする見解に対する稀有な文学的反論となっています。しかしながら、著者がヨハネスの特異性に注目したことは、これらの共同体とそれらの発展が個人や集団のレベルでいかに社会的変化を促したのかということについての我々の理解が不十分なままである理由の一つです。そしてもう一つの理由として、サン=タルヌール修道院長ジョンが、ヨハネスの功績と彼の【後世への】遺産についての自身にとってより好ましかった語りへの影響を最小限にするために、共同体の形成・解体に関わる重要な出来事の記憶にも介入したことがあげられます。以上のことは、『ヨハネス伝』が世俗的・宗教的領域における共同体の形成・解体に関する研究にとって非常に価値のある史料であるにもかかわらず、同時にそのようなプロセスに関して非常に主観的で、極めて婉曲・隠微な説明をしているという意味で、我々を方法的パラドックスのようなものに直面させているのです。

幸いなことに、この作品が未完成であることから、そのような著者の介入をいくつか見つけることは容易です。彼【=著者】がゴルズのヨハネスの生涯の中から得られるそのような情報の諸相を編集していることが我々に分かる最初の箇所は、彼【=ヨハネス】の幼少期と 10 代の頃についての一節の中にあります。それ【=物語】は、ヨハネスがヴァンディエールという村で、慎ましい社会的出自（興味深いことに著者が *mediocritas* と表している出自）の裕福な農夫と遥かに若い妻との間に生まれたという短い記述で始まります。続けて少年【=ヨハネス】の初期の教育について語られています。重要な情報が欠けているくぐりにはたくさんありますが、ここが一つ目です。917 年から 919 年にかけてのある時期に、10 代の若者だったヨハネスは教育を受けるためにメッスの町に送られましたが、彼の父親が【それを】認めず、すぐに彼をヴァンディエールに呼び戻しました。彼が戻ると今度はサン=ミエル修道院（ヴェルダン司教区）で教育を受けるために送られ、その場所でヒルデボルドゥスという名の師から教えを受けました。この時期の彼の教育は、彼があまり興味を持たなかったことから成功しませんでした。またこの教育は、父親の死後彼が農家の家長として父親の跡を継ぎ、その過程でヴェルダン伯にしてヴァンディエールの俗人

領主であったリクイヌスの盟友となった時に、突然終わりました。

この一節では多くのことが描かれないうまになっています。なぜヨハネスの最初の目的地としてメッスが選ばれたのでしょうか。彼【=ヨハネス】はメッスで誰の許に身を寄せたのでしょうか。なぜ彼の父親は彼を呼び戻したのでしょうか。そして、なぜその後彼はサン=ミエル修道院に送られたのでしょうか。著者はこの時期についての情報に乏しかったのかもしれませんが、というのも、これらの出来事は著者が『ヨハネス伝』の執筆にとりかかる半世紀以上も前に起こったのですから。しかしより詳しく見ると、彼【=著者】にとっての英雄【であるヨハネス】の身に起こったこの時期（彼【=ヨハネス】が自身の運命をまだ自由にできていなかった時期）の出来事はその後に影響しなかったのだ、と読者に思わせるように著者が努めたことは明かです。ところが実際には全くの逆でした。伝記作者【であるサン=タルヌール修道院長ジョン】が取り除くことに失敗した、次のようなことを示す手がかりが未完成のテキストには散りばめられているのです。すなわち、ヨハネスの両親は彼を聖職者のあるいは俗人の領主を中心とした在俗の共同体に紹介しようと意図していたものの、政治的な事情により途中でそのアプローチを変更せざるをえなかったのです。メッスに関して調べるところから始めましょう。Anne Wagner は、当時この都市には、司教座聖堂を除いて、ヨハネスに知的な教育を提供できる宗教的施設がなかったことを明らかにしています。これは、当時新たに任命された司教ウィゲリクスが、この10代の若者【=ヨハネス】のメッスにおける受け入れ先であったという見方に繋がります。しかし、著者であるサン=タルヌール修道院長ジョンは、少なくとも二つの理由で、彼【=ジョン】にとっての英雄【=ヨハネス】とウィゲリクスとの間の繋がりに言及することを避けることを望んでいたでしょう。第一の理由は、改革後のゴルズ修道院の副院長 provost としての後のヨハネスの考えと行動に反するような教会財産の扱いをウィゲリクスが支持していたという事実と関係しています。司教になる前、ウィゲリクスはゴルズ修道院の俗人修道院長であり、司教就任後には、様々な宗教施設が所有していた財産を、彼への支持と引き換えに俗人の支持者たちに分配しました。伝記作者あるいは彼の情報源が、910年代から920年代にかけてウィゲリクスと（後に修道院にまつわる事柄に対する俗人の介入に激しく反対するようになった）ヨハネスがどういうわけか関係を持っていたことを、読者に知られたいはなかったというのも当然です。メッスにおける少年の受け入れ先としてのウィゲリクスの役割に言及していない第二の理由として我々が考え得るのは、この司教がヴェルダン伯リクイヌスの政敵であったことです。リクイヌスは、ヨハネスがメッスにいた頃、ロタリングア宮中伯であり司教の親類でもあったビトガウのウィゲリクスの未亡人と結婚していました。おそらく、この結婚はヨハネスの親族にとってある種の利害の対立を生み出し、教育を受けさせるためにメッスに少年を送るのが賢明なことであるかを再考させたのです。

彼の村の領主を敵に回す危険性と、メッスにおける政治的不安定性をもたらした全体的な背景こそが、ヨハネスの父親に息子をヴァンディエールに呼び戻すよう促し、彼の周りに世俗の共同体を構築する試みを急遽やめさせた要因でした。ヨハネスの次の目的地であるサン=ミエルで、ちょうどその施設の俗人統治者であったヴェルダン伯と近くなったのは確かに偶然ではなかったのです。ヨハネスの両親が考えていた教育の最終目的が何であれ、彼らが明らかに意図していたのは、長男がヴァンディエールの俗人領主との繋がりを築くことでした。次の一連の出来事が示すように、この戦略は実を結びました。少年がサン=ミエルに到着してから間もなく彼の父親が亡くなった際、この10代の若者【=ヨハネス】は父親の財産の管理者にして「兄弟たちと家

に属する全ての *familia* の保護者」となりました。ここにおいてリクイヌスとの親密な政治的関係が始まり、数年間伯の「家」に仕えることになりました。見返りとして、彼はメッスにあるサン＝ピエール・オ・ノネ修道院の財産に属するヴァンディエールの教会を聖職禄として受け取りました。

このリクイヌスとの繋がりは、ヨハネスがまだ少年であった時に、明らかにヨハネスの親族によって画策されたものですが、伝記作者はそれに言及することを避けました。その代わりに彼が読者たちに伝えたのは、自身の個人的な功績によってヨハネ스가その地域の世俗及び聖界の支配者たちとさらなる繋がりを、言い換えるならば共同体を、築くことができたということでした。そういうわけで彼【＝ヨハネス】は、ヴェルダン司教ダドのグループと、隣接するトゥル司教区の貴族であるワルネリウスのグループに仲間入りしました。『ヨハネス伝』は、ヨハネスの徳と生き生きとした精神のゆえに彼がダドにとって魅力的な盟友となったこと、また所領管理者としての彼の才能ゆえに同様にワルネリウスの知遇を得ることになり、ワルネリウスがフォントノワ・シュル・モーゼルの農村にある教会の管理を彼に任せることにしたことを記述することで、これらの繋がりを明らかに能力主義的な見方で捉えています。ヨハネスとリクイヌスとの親交からヨハネスと司教ダドおよび貴人ワルネリウスとの親交に至るこのような突然の移行に続いて、物語の焦点がヨハネスのこうした世俗の共同体との関わりから、彼の宗教的な旅路へと移るというかたちで、またもや突然の移行が起こります。『ヨハネス伝』は、これらの世俗の共同体が衝突や周囲の情勢によって次々と解体されていく中で、ヨハネスがこれらの共同体の崩壊にどのように対処したのか読者に知らせないままにしているのです。923年に、リクイヌスはウィゲリクス一族の支持者であるアキテーヌ伯ボソに殺害されました。同年、ヴェルダンのダドも亡くなりました。そしてトゥルの貴人ワルネリウスは、彼が作中に最初に登場した時と同様に、突然作中から姿を消しました。物語の残りの部分ではもっぱらヨハネスの宗教的探究に焦点が当てられていますが、何よりも彼の親族の利害を守るため、彼が他のパトロンを探さざるを得なかったことは明々白々です。John Nightingale は、こうした人々【＝パトロン】の内の1人が、920年代後半あるいは930年代前半にゴルズの財産の一部の受益者となったメッス伯アデルベルトゥスであった可能性と、ヨハネスが司教ウィゲリクスとの間に持っていたはずの繋がりについて我々が何も知らないのと同じ理由で、アデルベルトゥスがパトロンだったことが物語から削除されたかもしれないことを、説得的に主張しました。アデルベルトゥスや他の俗人領主たちとの繋がりがテキスト中に記されていないことは、物語におけるもう一つの明らかな省略に目を向けさせることになります。それは、成人した頃にヨハネスが聖職者になった（そしてつまり、新しい共同体に加わった）ということです。彼のこの新しい地位を示しつつ、伝記作者は、メッスのサン＝ピエール・オ・ノネにおいて、ヨハネスが修道女たちの週番 *hebdomadarius* に就任したことに言及しています。もう一つの手がかりは、ゴルズの改革に関する説明の中にあり、その箇所では、934年初めに修道院に入った全ての成人が司祭服を着用していたということが言及されています。彼をこれらの任務に迎え入れたと考えられる人物として最も可能性が高いのは、メッス司教ウィゲリクスです。彼は、すでに言及しましたようにヨハネスにとっての有力者であったもののすでに亡くなったリクイヌスの政治的ライバルだっただけでなく、アデルベルトゥスに引継がれるまで、ゴルズ修道院の俗人修道院長でした。

以上のケースであれその他であれ、共同体の形成と解体というアイデンティティ形成の過程が『ヨハネス伝』の中で全く言及されていないという事実は、伝記作者がヨハネスと改革前の

『ゴルズのヨハネス伝』における社会的流動性・宗教的刷新・共同体形成

ゴルズ修道院とを結び付ける全ての繋がりを無視したかったということを明らかにしています。そして彼【=伝記作者】の第二の動機は、霊的発見と宗教的共同体構築のための10年にわたる旅を始めるため、920年代半ばに、それ以前に持っていた繋がり全てから自分自身を解放した人物として、ヨハネスの文学的描写を行うことでした。後のゴルズ修道院長を叩き上げの人物として描こうとするこの衝動は、明らかに、読者に対して歴史上のヨハネスの記憶を大胆に縮めて示すという代償を伴って現れてきたものです。

秘密の隠者たちの団ソキエタース体

ヨハネスの世俗的な繋がりが突然『ヨハネス伝』の背景に消えていったのと同じように、都市で禁欲的な生活を行う者たちの非公式な共同体が【作中に】突然現れます。ヨハネスはメッスに移動するとすぐに、私行においては禁欲的な探究に意欲的な関心を示しながらも、この地域の各地の司教座聖堂で責任ある公的な地位に就いていたり、特定の管理、知識、芸術の能力を誇っていたり、あるいは何らかの（決して高貴な出自を通じてということではない）形で有益な繋がりのある聖職者たちと連携しました。メッス、トゥル、ヴェルダンを行ったり来たりしながら、ヨハネスは一度に最大で一か月間、「評判の良い人々」の所に滞在し、まるで弟子かのように彼らの生活様式に加わりました。ヨハネスがこれらの聖職者や他の聖職者たちとともに学んだ経験に関するサン＝タルヌール修道院長ジョンの叙述は、中世盛期の宗教文化のうちに実証されており、教育学者の Jean Lave と Etienne Wenger が「実践共同体」と呼んだ参加行為のパターンと一致します。ヨハネスの禁欲教育は一連の師弟関係を伴っており、その中で彼はその都度特定の禁欲的な生活様式に能動的に参加することによって、それらの長所と短所を理解できるようになりました。これは、彼【=ヨハネス】と付き合いがあった人々の中には後に彼の社交範囲から消えてしまった人々もいたことを意味した一方、『ヨハネス伝』の中で引き合いに出されている人々の大半との関係は、彼【=ヨハネス】の志向が変化した後も存続するほど恐らく強いものでした。

伝記作者は、この新たに出現した、「Bruhn が言うところの」価値の共同体のインフォーマルな性質を主張していますが、興味深いことに、彼はその共同体について述べる際に「秘密の隠者たちの団ソキエタース体」という表現を使っています。この言葉の選択は、9世紀初め以降の司教令や教会会議決議の中で時折言及されている聖職者の *societates* を我々に思い起こさせます。これらのテキストにおいて、この用語は地方の司祭たちの間にあったさまざまな形の繋がりを表現するために使われています。あるケースでは、聖職者たちは、重要な祭日に一緒に食事をしたり、一緒に祈ったり、時事的な事柄について話し情報を交換したり、誰かが病気になったり亡くなった場合は相互に支援を行ったりするために、定期的に（場合によっては毎月）集まっていました。このような *societates* の無規律な性質や、これらが自由裁量、相互支援、情報交換、そして共有する霊性を共に賛美することに重きを置いていたことが、ヨハネスと彼の仲間たちに刺激を与えたのかもしれませんが。実際、920年代のメッス、トゥル、ヴェルダンではこのような非公式の *societates* がもはや機能していなかったものの、ある時期にヨハネスが同地における自身の繋がりを通じてこれらを知ることになったのだ、と考える理由はありません。言い換えれば、サン＝タルヌール修道院長ジョンが共同体の形成者としてのヨハネスの役割をひどく誇張していることは十分あり得ることです。

以上のように言ったものの、隠者たちの団ソキエタース体が聖職者たちだけで構成されたものではなかったことを著者は読者たちに伝えようとしています。「価値共同体」が社会的および機能的な観点だ

けでなく、ジェンダーの観点においても多様なものだったという Bruhn の主張に立ち戻りましょう。伝記作者は、自身の主張を明確にすべく、サン＝ピエール・オ・ノネ修道院にいたゲイサという名の若い修道女に言及しています。彼女はおぼと共、ヨハネスに深い感銘を与えた悔悛の生活を実践していました。修道院の囲壁の中で暮らす女性たちとヨハネスとの交流に関する著者の魅力的な解説は、彼【=ヨハネス】が男性修道士と交わしたかもしれない交流についての言及がないことは全く対照的です。一部の研究者は、著者が聖職者を読者として想定しながらこの物語を執筆したと推測することによって、この欠落を説明しようと試みました。しかしながら、我々はさらに二つの動機を考慮しなければいけません。一つ目は、当該地域の全ての男性修道院が不品行の場となっていたという著者の主張と関係があります。これはロタリンギアにおける男子修道制にとつての勝利を告げる新たな始まりとしてゴルズ修道院の「再生」を表現するという著者の目的にかなう大胆な主張です。そして第二の動機は、ヨハネスが修道士になる前に、この地域の一つあるいは複数の修道院、修道士たち、そして修道院の利害関係者たちと関わりを持っていたことの示唆を避けようとする、すでに述べた戦略です。ここでも、自由な主体として、また改革以前の【ゴルズ】修道院とは何のつながりもなくそこにやって来た人物としてのヨハネスという彼の文学的理想像を損なうような情報で物語を混乱させることを、伝記作者がいかに避けようとしていたかを理解することができます。テキスト上のヨハネスは、修道生活の構成と状況に対する回心後の態度が回心前の態度と一貫し、途切れの無いものであった人物として表現されているのです。

実際の人生においてヨハネスが関わっていた「価値共同体」の範囲が実態としてどのようなものであったにせよ、それがあまりに漠然としており、彼の期待に沿うものではなかったことは明らかでした。隠者や放浪者のような禁欲的な生き方の試みを幾重にも重ねた後、どのように先に進めば良いか途方に暮れたヨハネスは、絶え間なく続く祈りの日課、自身への鞭打ち、そして修道士が行うものと見分けがつかないほどの断食を組み込みつつ、自宅での私生活の中で禁欲的な生き方を実践し始めました。伝えられたところによれば、ヨハネスの修道士のような振舞いは、同じ屋根の下に住んでいた人々でさえほとんど気づかないくらいに慎重なものだったとされます。後者の評言は重要です。というのは禁欲的な生き方と宗教的共同体の形成を集中的に試みたこの時期を通して、ヨハネスは家長として、また恐らくは聖職者として、彼がなすべきその他の責務を果たし続けていたことを示唆しているからです。同様にこのことは、ヨハネスの生涯のこの段階において彼がまだ関わっていた非禁欲的で世俗的な種々の共同体に関する情報を、伝記作者が読者に対してわざと隠していたことを暴露するものです。

ヨハネスがメッスの街にある自宅における私生活に戻ったことに関する評言が我々の注目に値する第二の理由は、これがセグエとして機能し、エイノルドゥスと共同で行う企てとしての共同体形成計画を、どのようにしてヨハネスが密かに再開したのかという伝記作者の説明に話の切れ目なく移行しているからです。このエイノルドゥスはトゥルの助祭長であり、後のゴルズ修道院長ですが、教養があり、思慮深く、精力的な禁欲実践者であったという彼の人物像が、ヨハネスの個人的な理想に適合していました。メッスの隠者たちの^{ソキエタース}団体についてヨハネスから聞いたエイノルドゥスはメッスに向かい、そこで以前にヨハネスと共同体を形成した禁欲的な男女に会ったと物語は伝えています。このような出会いは頻繁にあり、恐らく出会った際の話話は広範囲にわたるものでした。しかし結局のところは、彼ら【聖職者たち】が「共同生活を行うことを誓った後一緒に暮らす」ことのできる場所を探すことが話題の中心になりました。物語の次の

部分は、いかんにして彼らが以前の役割から抜け出し、ゴルズ【修道院】において聖ベネディクト戒律に則った改革共同体を形成することになったかという語りに充てられています。ここでもまた、一連の出来事に関してサン＝タルヌール修道院長ジョンの説明が極めて婉曲・隠微なものであることが見て取れるでしょう。

ゴルズ修道院の形成と解体

ヨハネスとエイノルドゥスを中心とするグループがアダルベロのゴルズに対する介入にいかに関わるようになったのか、また、その後彼らがそこでいかんにして修道士の共同体を形成したのかというサン＝タルヌール修道院長ジョンの説明を解きほぐすのは困難です。これらの出来事に関する彼の説明の中では、ヨハネスがベネヴェントの人里離れた地域に移住するよう、仲間の隠者たちを説得しようと試みています。この地域はかつてヨハネスがイタリアへの旅の間に訪れた場所であり、彼はこの場所が都市社会から切り離され、ブドウ畑と肥沃な農地に挟まれた場所であると彼らに述べました。しかし【ヨハネスたちを中心とするグループはすぐにはそうせず】、メッス司教座聖堂参事会員であるベルナクルスを、司教アダルベロの相談役であるラントベルトゥスのもとに送り、このベネヴェントに新しい共同体を設立する準備ができていることを知らせました。アダルベロは、エイノルドゥスがクロデガングの参事会規則に従う義務から解放され、修道士になる許可を得たいのであれば、アダルベロに願い出るようエイノルドゥスに伝えるため、別の聖職者を手配しました。ベルナクルスは、新たな宗教的共同体を設立する場所としてゴルズを司教に対し密かに求めるよう、エイノルドゥスに伝えるという指示を受けました。そしてその後、アダルベロは必要な手はずを全て整えました。934年初頭、エイノルドゥス、ヨハネス、ベルナクルス、サレコとランディンクスという名の2人の聖職者、そしてテウティンクスとテウテルスという名の2人の少年が、新しい共同体の核となるためゴルズ修道院に入りました。物語のこの時点で、私が冒頭で記したメッス司教座聖堂での儀式が記述されています。

一連の出来事に関するこうした説明を提示するにあたり、伝記作者は、秘密の隠者たちのグループがアダルベロによるゴルズ【修道院】改革に関与するようになったのは偶然だと示唆しています。しかしながら、ヨハネスが自分の仲間たちに対してどのようにベネヴェント地方を描写したかを示す彼の記述は、明らかにゴルズ周辺の田園環境を反映しており、このことは、彼らがそこで新しい共同体を設立できるかどうか議論していたことを暗示しています。そしてこの一節から次の一節へと移る移行部分は唐突なものであり、ここでもまた著者が読者に情報を隠すことを選んだことが明らかです。ヨハネスのグループにいた聖職者たちの一部は、アダルベロの司教座参事会の中で、それゆえ司教区の運営においても、重要な立場を占めていたため、在俗聖職者として負っていた責務を放棄する計画を、彼らが秘密にしておくことは難しかったに違いありません。他方で、メッス周辺地域における同時代の政治に目を光らせていた者であれば、この段階においてゴルズ【修道院】が明らかに司教の思惑の中にあつたことを知っていたでしょう。929年に【司教に】選出されてから、アダルベロはいくつかの点で苦勞していました。まず、彼は貴族としてライバルであるアデルベルトゥス伯と彼のかつての協力者であつたボソに対して優位に立つことができていませんでした。彼は財政状況の改善もできておらず、権威ある教会指導者としての地位を築くこともできていませんでした。ゴルズ修道院を「復興」し「再生」するための介入は、政治的に扱いの難しい性質のものであつたため彼はこれを非常に慎重に行わざるを得ませんでした、

先に述べた目的を達成するための理想的な手段であるかのように見えていたのです。それゆえ、『ヨハネス伝』が伝えるアダルベロと秘密の隠者たちとの思いがけない合意という物語の裏には、この司教がゴルズ【修道院】への介入を入念に計画し、修道院のメンバーとしてふさわしい人々を見つけるために担当者を派遣し、そしてヨハネス、エイノルドゥス、およびメッスの聖職者数名がメンバーに立候補するよう求められた経緯に関する複雑な話が潜んでいたと我々は結論しなければいけません。そして10世紀後半に注意深く『ヨハネス伝』を読んだ者がいたならば、彼らもきっとこうしたことがあったのではないかと疑っていたことでしょう。しかし伝記作者は、このような話をするに興味がありませんでした。代わりに彼は、秘密の隠者たちの視点から、ゴルズ【修道院】が至人たちの共同体へと改革されたという物語を巧みに作りだし、その功績の大半を彼ら【=隠者たち】に帰そうとしたのです。

同様に、新たに改革された修道院での共同体形成に関するサン=タルヌールのジョンの記述も婉曲・隠微なものです。ここでは、7人の新メンバーで構成された当初のグループが急速に拡大し、修道士やかたて隠修士であった者たちすら含むまでに著しく多様化した経緯が述べられています。伝記作者の証言と証書による証拠にもとづいて、Michel Parisse は、960年代初めまでに約24人の修道士たちがゴルズ【修道院】で暮らしていたと見積もりました。しかし『ヨハネス伝』の中で、このような【多様性に関する】情報は主として一連の修道士個々人の道徳的な人物像という形で伝えられており、そこからは実際のベネディクト派修道士たちの共同体が作られた経緯を垣間見ることができるにすぎません。テキストが言及していない多くの物事の一つが、誰が聖職者、隠修士、俗人、そして少年たちからなるこの混成集団に対して修道士としてのあり方を教えたのかということです。そして改革前にゴルズ修道院に入っていた何人かの修道士たちがこの共同体形成において何らかの役割を果たした可能性は、彼ら全員が修練士とされたと示すことで、それとなく否定されています。それゆえヨハネスが『ヨハネス伝』の中で自らの道を切り開いた人物として描かれているのと同様に、ゴルズ【修道院】の改革共同体はそれ【=共同体】自体の力による成功の物語の中から立ち現れて来るのです。

改革共同体が修道士としてのあり方を学んだ経緯についての言及がないことに対しては、テキストの至る所にみられる主要なメンバーの学識に関する言及が一つの説明となります。しかし、たとえエイノルドゥスと彼の仲間たちが修道制の規範的・学問的伝統に関する理論的な深い知識を有していたとしてもなお、アイデンティティの共有は言うまでもなく、典礼や他のことに関する具体的なルーティンを外部の助けなしに作り上げることは非常に困難だと彼らは思ったことでしょう。また、他の修道院から1人あるいは複数の修道士を連れてくるのが修道院改革期にあった当時において一般的な手法であったということを考えると、そのような人々がゴルズに連れてこれなかったとは考えにくいのです。このテキストにおいて、メンバーによる実践、特に典礼の日課に関してかなり詳細に記されていることから、Anselme Davril は、『ヨハネス伝』中に描写されているゴルズの修道士たちの儀式慣行が、我々がフルーリーの最古の慣習の中に見ることのできる儀式慣行とかなり似ていることを証明し、両修道院における修道生活経験の間に密接なつながりがあることを示唆しました。【また】Davril は、ゴルズの改革共同体が当初、新たに改革されたトゥルのサン=テーヴル修道院からやって来たメンバーによって修道生活に関する訓練を受けたと示唆することによって、この密接な繋がりを説明しようとしていました。これに先立ってサン=テーヴル修道院にはトゥル司教ガウツリヌスに代わってフルーリー修道院長アルケンバルドゥスが介入していたのです。もう一つ考えなければいけないのは、ゴルズにおける改革以前の経

験や実践との断絶が、実際伝記作者が示唆するほどに徹底的なものであったとは、とてもではないが確信できないということです。John Nightingale による研究によると、史料が乏しい時期である 922 年から 934 年を除外できるとしたならば、9 世紀後半から 10 世紀初頭にかけてのゴルズ修道院は、約 30 人の修道士から成るかなり大きな共同体を抱えていました。彼らは、祈りの務めと典礼の日課をこなし、安定した人員補充のリズムを維持し、そして聖ベネディクトゥスの『戒律』のカロリング的解釈に従って組織されていました。おそらく、これら全ての重要な点に関して著者が沈黙しているのは、ゴルズの改革された儀式慣行が完全に自前のものであったことだけでなく、それ【＝慣行】が、従来同地で蓄積された宗教的共同生活の経験から根本的に逸脱していたことを示唆するためだったのです。

ゴルズの修道士たちが修道士としてのあり方を学んだ経緯に関する情報の省略と同様に注目すべきなのは、修道院長エイノルドゥスと彼の仲間たちが、有意義な共同体を作るという複雑で継続的な過程にどのように取り組んだのか、『ヨハネス伝』がほとんど説明していないということです。しかしながら、新たな修道士集団の大部分が成人の回心者であり、そしてこれらの人々が、自分が何者であり他者とどのように関わるのかということについての根深い観念を持っていたがゆえに、この取り組みは骨の折れるものであったとそれ【＝物語】は述べています。成人の回心は 970 年代から 980 年代にかけて書かれたいくつかの聖人伝における主要な焦点となっていますが、『ヨハネス伝』では、修道院という環境における共同体解体の主要なリスクとしてこの問題をはっきりと明るみに出しているという点において、他の聖人伝から際立ったものになっています。実際それは一連の逸話においてそのように【リスクと】なっており、そのうちの二つはヨハネス自身に関する逸話です。第一の話は、俗界の社会的不平等性が修道院へと入り込むことによって、修道院共同体内部の調和がいかに損なわれたのかというものです。下層出身の修道士たちが、日和見主義者でありまた出世主義者であるとヨハネスを非難したのだと書いてあります。修道生活に入るとすぐにヨハネスは全財産を修道院に寄付していましたが、2 人の兄弟、未亡人となっていた母親、そして彼の家に属する者数名をも連れてきていました。彼の兄弟たちは結局修道院生活に入ることになりましたが、彼の母親と数人の使用人たちは、修道院の敷地の周囲に住む場所を提供され、そこで布地を作り修道士たちに奉仕しました。『ヨハネス伝』はヨハネスの批判者たちの言葉を引用しています。「ここで自分のものを自由に保有し、さらにあなたの家にいる時よりもしっかりと手入れするために、策略によってあなたは自分のものをこの場所に持ってきた。」

ヨハネスに関するもう一方の逸話は、彼の「平凡な地位」が、俗世においてより高位にあった人々の反応を引き起こしたことへのいくつかの言及で構成されています。サン＝タルヌール修道院長ジョンが述べるところによると、ヨハネスは「^{フビリクス・カルニス}肉体の高貴さ」に欠けていたにもかかわらず、エイノルドゥスは当初、財産管理に関する彼の才能を理由に、修道院の財産を管理する責任を彼に負わせました。しかし、当初の 7 人のグループが新参者たちを加えて拡大していくや否や、アダルベロのおじであるフリデリクスが副院長になり、ヨハネスがフリデリクスの補佐に降格させられ、ヨハネスの地位は劇的に変化しました。その後 10 年にわたってヨハネスは、修道院において彼の改革共同体の共同設立者としての地位にそぐわないような多種多様な役割を与えられました。例えば、厨房の助手、庭師、貯蔵庫係、夜警、門番、修道院長補佐役がそれに含まれます。ゴルズ修道院は成人の回心者がもつばらその才能と学習への熱意にもとづいて役割を与えられる能力主義のユートピアだ、という考えが幻想だったことが明らかとなったのだと、伝記作者

はそのように読者たちにはっきりと理解させるのです。

あれやこれやの逸話を通して、改革初期のゴルズ修道院における生活は、共同体の解体という悲惨な過程を回避する努力の一環として、主要な登場人物たちが謙虚さと忍耐の徳に優れていることを示すよう求められた舞台劇として現れてきます。『ヨハネス伝』で述べられているように、この課題は、修道院をエリート、中間層、そして下層の集団に分離する危険に絶え間なく晒す社会的緊張に鑑みた際現れたものです。しかし実際には、テキストにはそれ以上のことが書かれています。それ【=テキスト】は、修道院の多様な成人の回心者たち、特に才能があることは明らかでも回心前の地位が低かったり並みであったりしたことを理由に指導的立場への昇進が危うくなっている人々の社会的野心を抑制しつつ、彼らの才能を育むために、エイノルドゥスが謙虚さと忍耐という原則に依拠していたのだともっともらしく示しています。我々がすでに見てきたように、ヨハネスはこのような人物の 1 人でした。彼は明らかに修道院の所領管理者になるための才能とそのような野心を持っており、934 年には一時的にその役割に就きましたが、彼が副院長として正式に任命されるまでには 15 年かかりました。最初の印象では、修道院における下位の役割を次々とヨハネスに与えることで、修道院長エイノルドゥスが彼の謙虚さと忍耐を試そうと決めたように思われます。しかし、ヨハネスが 935 年以降に果たした他の職務のいくつかをより詳しく見てみると、ストレスが多く大きな賭けでもある副院長という役割を得ることを見越して、エイノルドゥスが一連の補助的・管理的な役割という公職歴 *cursus honorum* を彼に経験させたというのが妥当なところでしょう。衣装係、夜警、そして門番の役割は院内生活における内部経営や修道士たちの外部世界との交流の監視にとって特に重要でした。ゴルズ【修道院】の証書史料によれば、エイノルドゥスがこの【役職付与に関する】戦略を他の修道士たちにも適用していたことが分かります。そして『ヨハネス伝』の記述から判断するに、改革修道院の出現から早いうちに一部の高位の出自の人々が昇進したことが、それほど高貴な社会的出自ではないその他の修道士たちが修道院内で出世する道になるであろうと彼【=エイノルドゥス】は知っていて、そうしたのかもしれません。940 年代中頃までに、高位の経歴を持つ修道士たちの大半が引き抜かれてロタリンギア各地の他の修道院において修道院長となったため、【ゴルズ修道院から】いなくなりました。このことはヨハネスを含むより低い身分の修道士たちに対して、徐々に出世し、その過程で重要な経験を得る機会を与えてくれました。

『ヨハネス伝』が突然終わるため、エイノルドゥスの在職期間の後半にこの戦略がどのように展開されたのか、また皇帝のための外交任務を始めるために、950 年代初期にどのような状況下でヨハネスが副院長としての地位を捨てたのか、我々は知ることができません。ヨハネスは修道院での自分の役割に不満だったのでしょうか。また、実際に彼はどのようにして皇帝の宮廷との繋がりを築いたのでしょうか。また、修道院におけるその後の彼のキャリアを形成した要因は何であったのでしょうか。これら全ては、この物語が未完成なものであるが故に、未解決のままになっています。しかし恐らく、サン＝タルヌール修道院長ジョンがこの情報を読者に伝えることができないからといって、我々は落胆しすぎてはいけません。もし彼が『ヨハネス伝』を完成することができていたのならば、おそらく彼はこの時期の記述を、現在残っているテキストと同じように選択的かつ著しく偏向的なものにしたことでしょう。

結論

本講演における分析から現れてくるサン=タルヌール修道院長ジョンが執筆した『ヨハネス伝』は、ヨハネスという人物と彼の宗教的環境に関する生き生きとした記憶がすでに消え始めていた時期において、ヨハネスとゴルズ【修道院】の共同体について周到に作り上げられた叙述でした。この伝記の異例な言説、婉曲・隠微な主張、そして未完成の状態といったもの全てが、著者が想定していたこの作品の結末を理解し難くしています。しかし逆説的に、今述べた特徴のおかげで我々は、彼【=著者】がヨハネスの伝記的記憶とゴルズ修道院の共同体的記憶のうちのどの部分に手を加えたのかを知ることができ、また、その理由を考えるために文脈がもたらす証拠に頼ることができるようになります。ヨハネスの生涯のうち修道生活への回心以前を扱うテキスト序盤において、自らが関わる世俗的・宗教的共同体を自発的に選び、一つの「価値共同体」ないし「実践共同体」から別の共同体へと換える際も自身の好みや野心によって決めることができた自由な主体として彼を表現することに、著者は最善を尽くしました。そして、ヨハネスが回心した後の時期を950年代初めまで扱う第二の部分において、彼【=著者】の目的は二つありました。一つは、禁欲生活における至人たちが自ら作り上げた共同体として、改革されたゴルズ【修道院】の成功を讃えることです。そして二つ目は、その共同体を崩壊に至る瀬戸際まで追い込んだ緊張を強調することにありました。このように、『ヨハネス伝』は共同体の形成と解体の過程を中心に据えており、これは10世紀における社会や宗教の変化に関して既存のものを置き換えるような説明を作り上げようと試みている研究者たちにとって最も重要な史料です。しかしこの点における【同作品の】重要性は、ニュアンスのあるものとして受け止めなくてはなりません。なぜなら著者が現実の記憶に介入し、これらの過程に関しては著者に都合の良いかたちに情報が取捨選択された説明がなされているからです。

参考文献目録（一部抜粋）

1. 校訂版テキスト

John of Saint-Arnoul, *Vita Johannis Gorziensis*, ed. and trans. Peter C. Jacobsen, *Die Geschichte vom Leben des Johannes, Abt des Klosters Gorze* (Wiesbaden, 2016).

2. 二次文献

L'abbaye de Gorze au Xe siècle, ed. Michel Parisse and Otto Gerhard Oexle (Nancy, 1993).

Barone, Giulia, 'Une hagiographie sans miracles. Observations en marge de quelques vies du Xe siècle', in *Les fonctions des saints dans le monde occidental (IIIe-XIIIe siècle)* (Rome, 1991), pp. 435–46.

Boshof, Egon, 'Kloster und Bischof in Lotharingen', in *Monastische Reformen im 9. und 10. Jahrhundert*, ed. Raymund Kottje and Helmut Maurer (Sigmaringen, 1989), pp. 197–245.

Bruhn, Stefan, *Reformer als Wertegemeinschaften. Zur diskursiven Formierung einer sozialen Gruppe im spät-angelsächsischen England (ca. 850-1050)* (Ostfildern, 2022).

Hochholzer, Elmar, 'Die Lothringische ('Gorzer') Reform', in *Die Reformverbände und Kongregationen der Benediktiner im deutschen Sprachraum*, ed. Ulrich Faust and Franz Quarthal (St. Ottilien, 1999).

Lave, Jean and Etienne Wenger, *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation* (Cambridge, 1991).

Margue, Michel, 'Lotharingen als Reformraum (10. bis Anfang des 12. Jahrhunderts). Einige einleitende

- Bemerkungen zum Gebrauch räumlicher und religiöser Kategorien', in *Lotharingen und das Papsttum im Früh- und Hochmittelalter: Wechselwirkungen im Grenzraum zwischen Germania und Gallia*, ed. Klaus Herbers and Harald Müller (Berlin, 2017), pp. 22–33.
- Nightingale, John, *Monasteries and Patrons in the Gorze Reform. Lotharingia c. 850-1000* (Oxford, 2007).
- Parisse, Michel, 'La culture au service de la réforme monastique. Les clercs Toulousains et l'abbaye de Gorze au Xe siècle', in *Lotharingia. Archives lorraines d'archéologie, d'art et d'histoire* 7 (1997), pp. 27–37.
- Parisse, Michel 'Restaurer un monastère au Xe siècle. L'exemple de Gorze', in *Vita religiosa im Mittelalter. Festschrift für Kaspar Elm zum 70. Geburtstag*, ed. Stephanie Haarländer, Franz J. Felten, and Nikolas Jaspert (Berlin, 1999), pp. 55–78.
- Pohl, Walter, 'The Construction of Communities and the Persistence of Paradox: An Introduction', in *The Construction of Communities in the Early Middle Ages*, ed. Richard Corradini, Max Diesenberger, and Helmut Reimitz (Leiden, 2003), pp. 1–15.
- Vanderputten, Steven, 'Communities of Practice and Emotional Aspects of Loyalty in Reformist Circles of the Tenth and Eleventh Centuries', in *Loyalty in the Middle Ages. Ideal and Practice of a Cross-Social Value*, ed. Jörg Sonntag and Coralie Zermatten (Turnhout, 2015), pp. 279–303.
- Vanderputten, Steven, 'Community Building as a Vector of Social and Religious Change in the Life of John of Gorze (974/978-84)', in *Anglo-Norman Studies* 45 (2022), pp. 164–80.
- Wagner, Anne, *Gorze au XIe siècle. Contribution à l'histoire du monachisme bénédictin dans l'Empire* (Turnhout, 1997).
- West, Charles, 'Group formation in the Long Tenth Century: A View from Trier and its Region', in *Das lange 10. Jahrhundert. Struktureller Wandel zwischen Zentralisierung und Fragmentierung, äußerem Druck und innerer Krise*, ed. Christine Kleinjung and Stefan Albrecht (Regensburg, 2014), pp. 167–78.

【解説】

上に訳出されたのは、2023 年 12 月 7 日に東京大学大学院人文社会系研究科の国際人文学プロジェクト「海外ゲスト授業支援」の枠内で実施されたスティーヴン・ヴァンデルプッテン教授によるオンライン・ゲスト講義である。このような貴重な機会を可能とする支援をいただき、研究科および担当者の皆さんにはあらためてお礼申し上げたい。なお本誌への翻訳掲載にあたっては、ヴァンデルプッテン教授に依頼して当日の読み上げ原稿に主要参考文献目録を追加していただいた。翻訳は、同研究科の博士課程に在籍する弓岡弘樹氏が担当している。

現在ベルギー・ヘント大学で上級正教授として初期・盛期中世史を講じるヴァンデルプッテン教授は、アントウェルペン大学で学んだのち、2000 年にヘント大学で博士号を取得した。その後、9 世紀から 11 世紀にかけての西ヨーロッパ地域における修道制に関する多数の著書・論文を刊行し、現在この分野におけるリーディング・スカラールである。とりわけ、ロートリンゲン地域やフランドル地域などにおける 10 世紀以降の修道院改革、修道女（ヴァンデルプッテン氏は初期中世に関して「修道女 nun」や「律修修女 canonesses」を厳密に区別することを避け、ラテン語 *religiosae* に対応した *women religious* という表現を用いている。今回訳出された講義でも同様だが、今回の訳稿では「修道女」としている）に関する研究書を刊行してきた他、幾つもの論集を編纂し、複数の研究プロジェクトを主催してきた。2020 年に刊行された *Medieval Monasticisms. Forms and Experiences of the Monastic Life in the Latin West* (De Gruyter Oldenbourg) は、中世のキリスト教修道制に関

『ゴルズのヨハネス伝』における社会的流動性・宗教的刷新・共同体形成
する最新の概説にして研究入門書として有用な書物である。

菊地は2023年7月にドレスデン工科大学で開催されたワークショップに参加した折に、ヴァンデルプッテン教授と面識を得た。その際、同年度の大学院演習で講読していた『聖ゴルゴニウスの奇跡』の著者とも考えられているゴルズ修道院長ヨハネスやその伝記について教授が近年集中的に研究していたという縁で、ゲスト講義をお願いすることとなった。なお、同年11月下旬には東京都立大学准教授の大貫俊夫氏の招聘により来日し、国際研究集会 *Transcending the Tangibility and Intangibility: Religion and Media in Pre-Modern East and West Eurasia* (2023年11月25・26日、主催：学術変革領域研究(B)中近世における宗教運動とメディア・世界認識・社会統合：歴史研究の総合的アプローチ[課題番号20B103])に参加した。ありがたいことにその機会を利用して、11月28日に東京大学本郷キャンパスにて大学院生やポスドクなど若手研究者との交流会を催すことができたため、学生たちは教授のパーソナリティを直接知ることができた上で9日後のゲスト講義に臨むことが可能となった。滞在中のタイトなスケジュールの中、そのような「サブイベント」の開催を実現して下さった大貫准教授とヴァンデルプッテン教授にこの場を借りてあらためてお礼申し上げたい。加えてヴァンデルプッテン教授は、ベルギー帰国後まもないうちに朝からオンラインで講義を行なうというスケジュールになってしまったにもかかわらず、快く今回の企画をお引き受けくださり、その講義で参加者たちを知的興奮に導いてくださった。重ねて感謝申し上げる。

(菊地重仁)